

史跡中小田古墳群整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書  
—広島市安佐北区口田南町所在—

2026

広島市教育委員会  
公益財団法人広島市文化財団

# は し が き

広島市では、史跡中小田古墳群の保存・活用を図るため、文化庁や有識者等の意見、助言を受けて令和3（2021）年度に「史跡中小田古墳群保存活用計画」を、令和4（2022）年度に「史跡中小田古墳群整備基本計画」を策定し、これらの計画に基づき、現在整備事業を進めております。

本古墳群は、急峻な斜面に囲まれた丘陵の尾根部に位置し、簡易な運搬車両でも乗り入れが困難な状況にあります。このため、将来にわたり同古墳群を適切に保護・管理するために必要となる管理用道路の新設を、整備事業の一環として計画的に進めているところです。

今回発掘調査を実施した場所は、当該管理用道路の予定路線上にあり、平成14（2002）年度の遺構状況確認調査において弥生時代の遺物が確認されていることから、工事に先立ち発掘調査を行いました。その結果、本古墳群が築造される時期の直前に存在した建物跡が確認されるなど、本史跡の変遷を解明する上で新たな知見が得られ、今後の研究にも大きく寄与するものとなりました。

今後も、各計画に基づき、史跡に関心のある方々が安全に訪れることができる環境の整備を進めるとともに、地域の重要な文化財の価値を高められるよう、適切な保護・管理に努めてまいります。

最後になりましたが、本調査の実施に当たり御協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。本書が、今後の調査研究を始め、遺跡の保護・整備活用、さらには歴史学習の分野において広く活用されることを願っております。

令和8（2026）年3月

広島市教育委員会  
教育長 松井 勝憲

## 例 言

1. 本書は、「史跡中小田古墳群保存活用計画」及び「史跡中小田古墳群整備基本計画」に基づく管理用道路整備に伴い、令和7（2025）年度に実施した発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島市教育委員会（広島市市民局文化スポーツ部文化振興課が補助執行。以下、「教育委員会」とする。）から委託を受け、公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課（以下、「文化財団文化財課」とする。）が実施した。
3. 本書の執筆・編集は、高下洋一・近藤博美が実施した。
4. 遺構の実測・写真撮影、図面の製作は楢木敬太・高下・近藤が実施した。また、遺物の実測・製図は高下が実施し、写真撮影は日原絵理が実施した。
5. 第1図は、ひろしま地図ナビによる10,000分の1の地形図を50,000分の1に縮小し、編集したものである。
6. 遺構実測等に使用した基準点については、広島市安佐北区役所農林土木部地域整備課が設置したものを使用した。
7. 本書に使用した挿図の方位は方眼北である。
8. 本書に使用した遺構名の略号は以下のとおりである。  
S I：竪穴建物　S K：土坑　S P：柱穴等
9. 土層断面図及び土器の色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行）に拠った。
10. 本発掘調査で得られた資料は、教育委員会から委託を受け、文化財団文化財課において保管している。

# 目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	3
1	1 自然的・地理的環境	3
2	2 歴史的環境	3
III	遺構と遺物	11
1	1 調査の概要	11
2	2 基本層序	11
3	3 遺構	14
4	4 遺物	17
IV	まとめ	24

# 挿 図 目 次

第 1 図	周辺主要遺跡分布図	4
第 2 図	地形図	7-8
第 3 図	発掘調査範囲図	10
第 4 図	下段地点西壁土層断面図(上)、中央南北土層断面図(下)	12
第 5 図	遺構配置図	13
第 6 図	SI1 実測図	15
第 7 図	SI1 エレベーション図	16
第 8 図	SK1 実測図	16
第 9 図	上段地点トレンチ土層断面図	17
第 10 図	下段地点出土遺物実測図	20

# 付 表 目 次

第 1 表	土器観察表	21
第 2 表	石製品観察表	23
第 3 表	金属製品観察表	23

## 図 版 目 次

- 図版 1 a 下段地点（調査前・南から）  
b 上段地点（調査前・南から）
- 図版 2 下段地点西壁土層オルソ画像（東から）
- 図版 3 a SI1 完掘状況（南から）  
b SI1 完掘状況（東から）
- 図版 4 a SI1 南北方向土層オルソ画像（西から）  
b SI1 東西方向土層オルソ画像（南から）
- 図版 5 a SI1 遺物出土状況（南から）  
b SI1 遺物出土状況（北東から）
- 図版 6 a SK1 完掘状況（北西から）  
b SK1 完掘状況（北東から）
- 図版 7 a 上段地点トレンチ完掘状況（北西から）  
b 上段地点トレンチ完掘状況（北から）
- 図版 8 出土遺物（1）
- 図版 9 出土遺物（2）
- 図版 10 出土遺物（3）
- 図版 11 出土遺物（4）
- 図版 12 出土遺物（5）

# I はじめに

史跡中小田古墳群（以下、「中小田古墳群」とする。）は昭和36（1961）年に第1号古墳から三角縁神獣鏡が出土したことで全国的に知られるようになった。その後実施された発掘調査により、第1号古墳は前方後円墳であり、竪穴式石槨から車輪石や勾玉などが出土し、第2号古墳では、竪穴式石槨から、甲冑、鉄剣、鉄鏃など大量の武具・武器類が出土した。これらの成果から、古墳時代前半期における国家形成期の状況を解明する上で重要な位置を占めるものとして、平成8（1996）年11月11日に国の史跡に指定された。

その後、広島市では、中小田古墳群の保存・活用を図るため、令和3（2021）年度に「史跡中小田古墳群保存活用計画」、令和4（2022）年度に「史跡中小田古墳群整備基本計画」をそれぞれ策定し、これらに基づき整備事業を進めることとなった。整備事業の実施に当たり、同古墳群を適切に保護・管理するために必要となる管理用道路の新設が計画・設計された。

当該管理用道路の設置に当たっては、令和7（2025）年4月14日付け広文振第36号により、広島市市民局文化スポーツ部文化振興課文化財担当が文化庁長官宛てに史跡中小田古墳群の現状変更許可申請を行い、令和7（2025）年5月16日付け7文庁第904号で許可を受けた。管理用道路事業用地は、昭和55（1980）年報告書による「弥生後期土器包含層」内に位置しており、掘削範囲については、記録保存の措置が必要であると判断された。

令和7（2025）年7月7日付けで広島市長から、公益財団法人広島市文化財団に対し、発掘調査及び調査報告書作成を依頼し、令和7（2025）年7月9日に契約を締結した。現地発掘調査及び埋戻し作業は、令和7（2025）年9月1日から令和8（2026）年2月2日まで実施した。また、整理作業及び報告書作成は、令和7（2025）年11月から令和8（2026）年3月まで実施した。

発掘調査の関係者は次のとおりである。

調査委託者 広島市市民局文化スポーツ部文化振興課文化財担当

調査主体 公益財団法人広島市文化財団

調査担当課 公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

調査関係者 胡麻田泰江 理事長

仁井 敏子 常務理事（事）文化事業部長

薬師地直樹 常務理事（事）文化科学部長

稲坂 恒宏 文化財課長

楯木 敬太 文化財課課長補佐（事）主任

調査担当者 高下 洋一 文化財課学芸員

近藤 博美 文化財課学芸員

調査補助員（50音順）

出川チズエ 岩本泰則 川口泰洋 木村鉄美 新宮原充 田中光夫 西奥幸子

整理作業員（50音順）

佐伯ひとみ 菅原彰子 村田智子

なお、広島市市民局文化スポーツ部文化振興課、安佐北区役所農林建設部地域整備課、大人のかくれ家（代表木戸敏明氏）をはじめ多くの方々には、調査を円滑に進めるため多大なご配慮とご協力をいただいた。また、当財団の埋蔵文化財発掘調査指導委員である広島大学名誉教授藤野次史氏、県立広島大学名誉教授鈴木康之氏、広島大学大学院教授野島永氏、比治山大学教授安間拓巳氏から貴重なご指導・ご助言を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。

## Ⅱ 位置と環境

### 1 自然的・地理的環境

中小田古墳群は、広島市安佐北区口田南町に所在する。広島県北西部の冠山山塊を水源とする太田川は、可部町付近で流路を南に変え、広島の三角州へと流下するが、本古墳群はその東岸に位置する。

古墳群は標高 331.5 m の山塊の最高所から北面に延びる丘陵稜線上に築造されている。標高 60 m から 130 m にかけての狭い稜線上に、自然地形を最大限に利用して古墳が配置されている点に特徴が認められる。

古墳時代当時、現在の安芸大橋付近まで海が入り込んでいたと推定され、中小田古墳群は内海交通の拠点を見下ろす位置にあったと考えられる。太田川下流域における交通の要衝を掌握し得る地理的優位性を背景として、中小田古墳群は形成されたものと理解される。

### 2 歴史的環境

中小田古墳群が所在する安佐北区旧高陽町一帯は、高度経済成長期以降の大規模住宅団地造成に伴い発掘調査が進展し、矢口・玖村の地域を中心として弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が数多く確認された地域である。

#### (1) 縄文時代

縄文海進期以降、現在市街地化している広島市中心部は未だ陸化してはおらず、比治山などの島嶼が点在する地形であったとみられる。

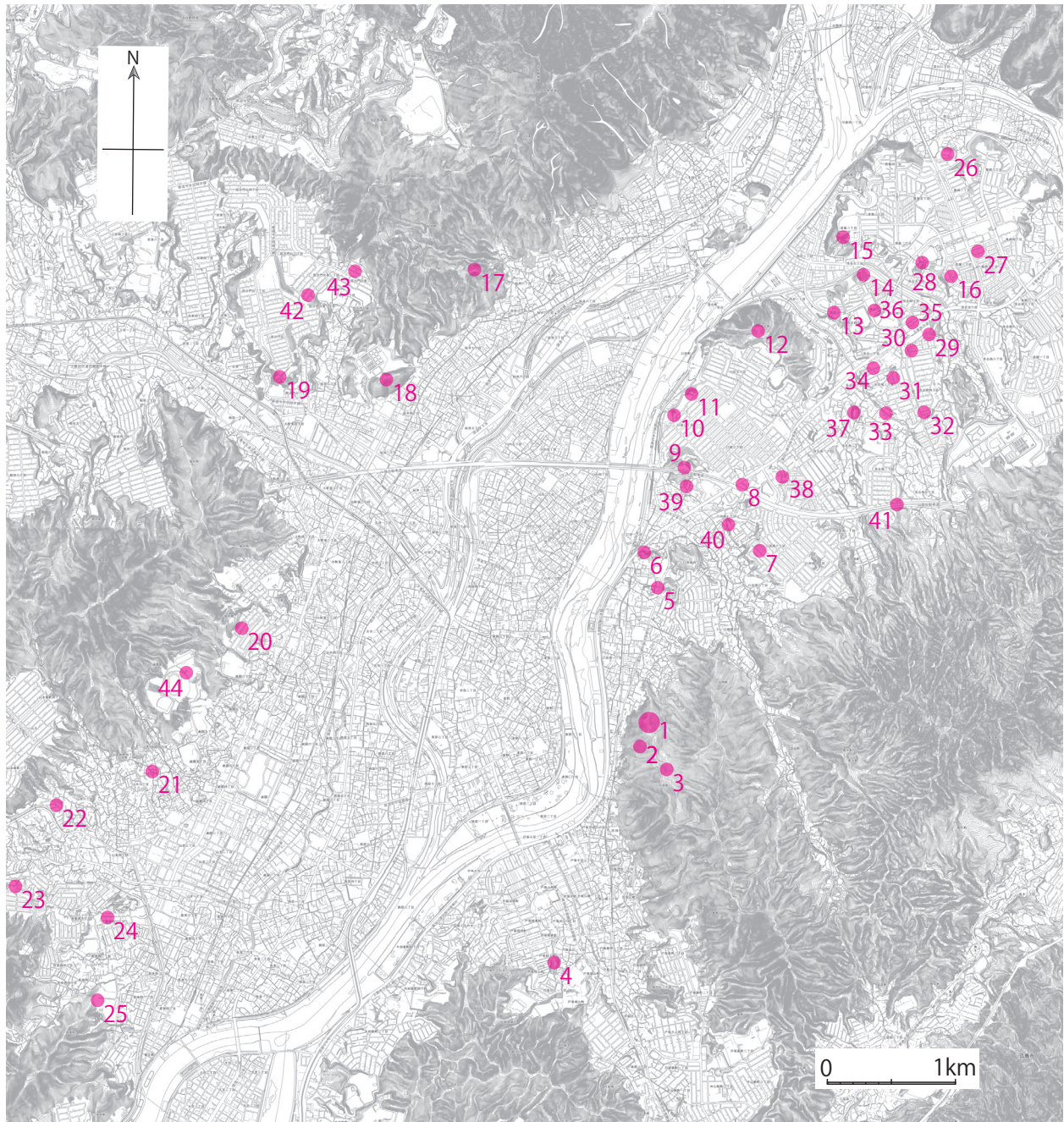
縄文時代早期の代表的な遺跡としては、東区の早稲田山遺跡がある。現在の早稲田神社の丘陵西斜面より多量の無文厚手土器、山形及び楕円の押型文土器や打製石器類が出土した（潮見 1960）。

後期の代表的な遺跡としては、安芸区の矢野小学校遺跡及び南区の比治山貝塚が挙げられる。矢野小学校遺跡は矢野川の形成した小扇状地の中央に位置し、標高約 9 m の地点にある。遺跡は同校校庭の拡張工事中に見つかったもので、後期中津式土器や弥生土器なども出土した。また、比治山貝塚は比治山南麓の往時の汀線付近に形成されたハマグリ・カキ・アサリなどよりなる貝塚で、多くの縄文土器も確認されている（河瀬 1979）。同じく、後期後半の津雲 A 式土器が安佐北区の弘住遺跡から出土している（石田編 1983）。

#### (2) 弥生時代

弥生時代前期の主要な遺跡としては、東区の中山貝塚が知られている。中山貝塚は中山稲生神社の丘陵南斜面にある。弥生時代の貝塚としては比較的大規模なもので、ハマグリ・カキ・アサリなどの海産貝類をもって形成されている。

中期の遺跡は弘住遺跡、大明地遺跡（妹尾 1987a）、狐が城遺跡（小都・脇坂 1977）などに限



第1図 周辺主要遺跡分布図 (S = 1/50,000)

1. 中小田古墳群
2. 山武士塚古墳群
3. 湯釜古墳
4. 長尾古墳群
5. 上小田古墳群
6. 弘住古墳群
7. 道川古墳群
8. 大久保古墳
9. 大名地遺跡
10. 西願寺遺跡群
11. 西願寺北遺跡
12. 梨ヶ谷遺跡
13. 地藏堂山古墳群
14. 山手古墳群
15. 恵下古墳群
16. 諸木古墳群
17. 宇那木山古墳群
18. 神宮山古墳
19. 白山古墳群
20. 大町七九谷遺跡群
21. 三王原古墳
22. 寺山古墳群
23. 空長古墳群
24. 池の内古墳群
25. 権地古墳
26. 狐ヶ城遺跡群
27. 西山・北山遺跡群
28. 寺迫遺跡
29. 末光C地点遺跡
30. 末光A地点遺跡
31. 末光D地点遺跡
32. 末光B地点遺跡
33. 末光E地点遺跡
34. 岩の上山田遺跡
35. 大井遺跡群
36. 金平遺跡
37. 城前遺跡
38. 高陽台A地点遺跡
39. 大久保遺跡
40. 中矢口遺跡
41. 金川遺跡
42. 毘沙門台遺跡
43. 毘沙門台東遺跡
44. 広島経済大学構内遺跡群

定されており、後期になると増加傾向が認められる。

発掘調査が行われた弥生時代後期の集落遺跡をみると、概ね 50 ～ 70 m の低丘陵尾根上に、数基の竪穴式住居が検出されており、3・4 戸を一単位とする小規模集団が形成されていた可能性が高い（河瀬 1979）。

弥生時代後期には、太田川が度々氾濫して流路を変えており、耕作に適した沖積低地が広がらず、生産力もあまり向上しなかったものと考えられる。そのため、支流となる小河川が流れる谷あい耕地とし、そこを眼下に見下ろすような丘陵緩斜面上に集落が形成される傾向があったと考えられる。

弥生時代終末期には、太田川東岸の口田・高陽の低丘陵上では、河原石を使用した竪穴式石槨に類似する埋葬施設を持つ墳墓群（西願寺遺跡群（金井編 1974）、西願寺北遺跡（石田 1991）、梨ヶ谷遺跡 B 地点（荒川編 1998））が集中して認められる。これらの首長墳墓から、後述する弘住第 3 号古墳を経て中小田第 1 号古墳へと系譜が連続する様相を示すものと理解される。

なお、中小田第 4 号古墳は、平成 10（1998）年度確認調査で木棺直葬を埋葬施設とし、副葬品として鉄短剣・有袋鉄斧が確認されたことから、弥生時代終末期から古墳時代初頭の墓葬とみなされている（平田・高下 2021）。

おおよそ古墳時代初頭までは丘陵尾根・緩斜面上が居住地として利用されたが、それ以降は古墳造営地へと転換したものと考えられる。

### (3) 古墳時代

中小田第 1 号古墳と同じ古墳時代前期に築造されたものとしては、太田川東岸側では弘住第 3 号古墳（石田編 1983）、弘住第 1 号古墳（石田編 1983）、大明地第 1 号古墳、山武士塚第 1 号古墳（石井・角田 1995）などがある。

このうち弘住第 3 号古墳は直径約 25 m の円丘に東西方向に幅 5 m の突出部が付く特殊な墳丘形態をもつ。埋葬施設は、内法全長約 2.7 m・幅 1.2 m の竪穴式石槨である。石槨内から槍 1、刀子状鉄製品 1、鉄鏃形鉄製品 1、大型鉄鏃 4、類銅鏃形鉄鏃 26、やす 6、鉄斧 1、鉋 2 が出土した。石槨上に供献された土師器から、中小田第 1 号古墳に先行する 3 世紀後半に築造されたものと考えられ、太田川下流域では最古の古墳のひとつといえる。

中小田第 1 号古墳に後続するのが、中小田古墳群と同一丘陵に位置する山武士塚第 1 号古墳である。山武士塚第 1 号古墳は全長 33 m の前方後円墳で、後円部には全長 3.7 m・幅 1.1 m の竪穴式石槨が造られていた。山武士塚第 1 号古墳に続く首長墓としては、4 世紀末頃と推定される全長 42 m の前方後円墳である東区長尾第 1 号古墳が想定される（村田・高下 2001）。

その後、5 世紀以降の太田川下流域においては目立った規模の古墳はみられなくなり、直径 30 m 以下の小規模古墳が小単位毎に築造される傾向にある。すなわち、上小田古墳、山手古墳群（小都・脇坂 1977）、真亀第 1・2 号古墳（中田・松村 1977）、恵下古墳群（中田 1977）、道川古墳群（石田編 1982）、大明地第 2・3 号古墳（妹尾 1987a）、大久保古墳（妹尾 1987b）、地藏堂山古墳群（松村 1977）、諸木古墳（桧垣・佐伯 1977）などが連綿と造営されることになる。

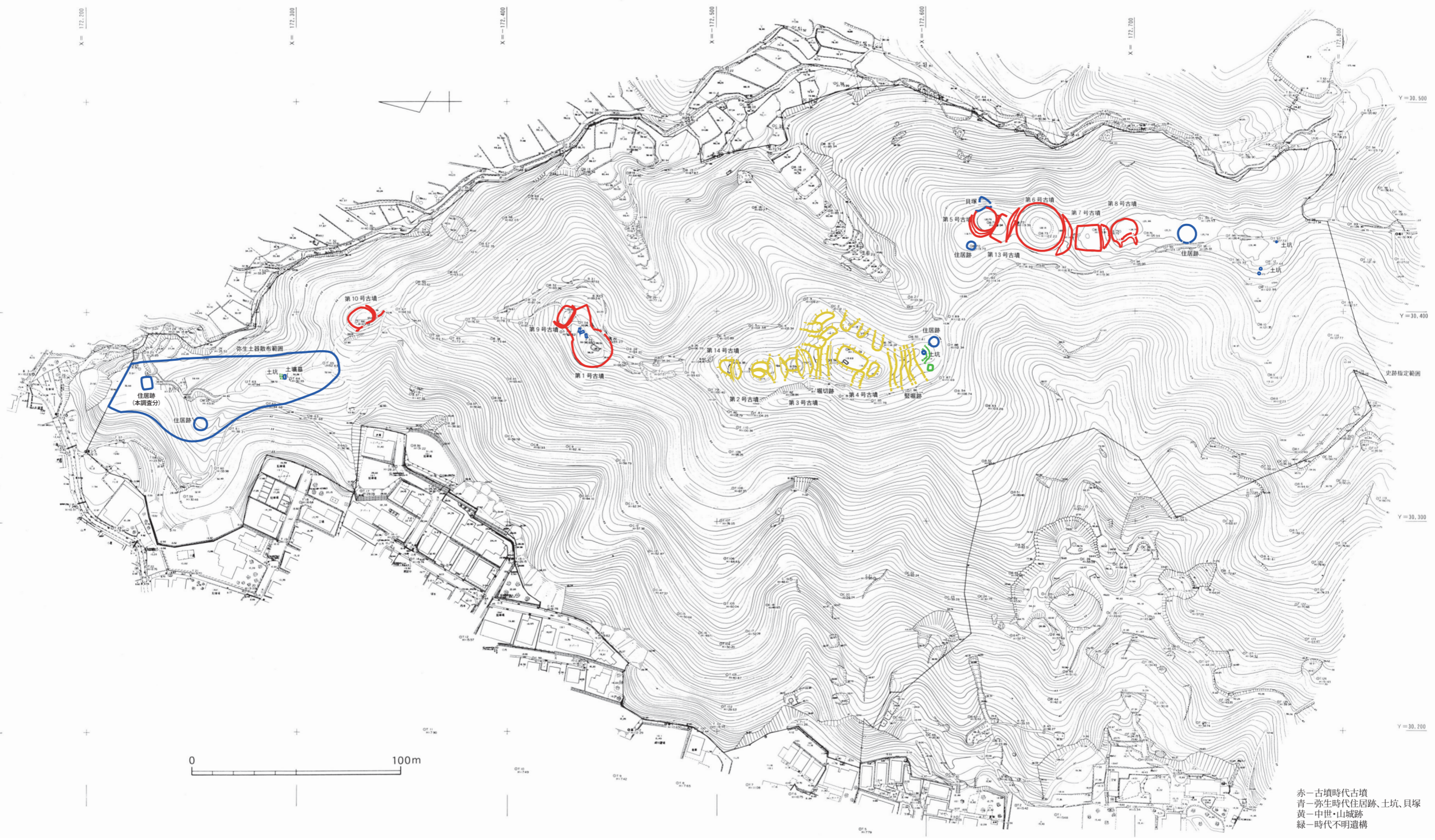
上小田古墳は、組合式石棺を埋葬施設とする直径 25 m の円墳で、床面に玉砂利を敷いた棺内から鉄剣 1、鉄刀 1、鎌 1、鉄斧 1、棺外から鉄剣 1、鉄斧 1 が出土しており、5 世紀初頭頃に築造されたと考えられる（本村 1960）。地蔵堂山第 1 号古墳は木棺直葬の 17 m × 14 m ・高さ約 3 m の方墳で、墓壙内から素環頭大刀 1、鉄刀 1、鑄造鉄斧 2、刀子 1、鉸具 1、鉄鏃 1、針 1、U 字形鋤もしくは鋤先 1、鎌 1、有孔円板 15 が、周溝から銚 1 が出土しており、5 世紀前半頃の築造と推定される。

太田川西岸側には、同時期の前方後円墳として宇那木山第 2 号古墳（広島大学ほか 2003）、神宮山第 1 号古墳（小清水ほか 1986）などがある。宇那木山第 2 号古墳は全長約 40 m で、後円部には 2 基の埋葬施設が造られており、中央の竪穴式石槨からは仿製珠文鏡 1、槍 1、鉄剣 1、鉄斧 1、鉈 1 が出土した。また、北側の竪穴式石槨からは舶載画文帯神獸鏡 1 が出土した。墳丘覆土から土師器が出土しており、4 世紀前半の築造と考えられている（広島大学 2002）。なお、この古墳の墳丘形態と東岸の弘住第 1 号古墳が類似することから、弘住第 1 号古墳の築造時期を 4 世紀前半まで遡らせる考え方もある。神宮山第 1 号古墳は全長約 20 m で、後円部に 3 基の竪穴式石槨が造られている。その一つからは内行花文鏡の破片が見つかっており、4 世紀中頃の築造と推定された（小清水ほか 1986）。

これら太田川西岸の古墳と、東岸にある中小田第 1 号古墳との関係は不明であるが、東岸側には前代から首長墓が連続して営まれた様相をたどれるという優位性が認められる。一方で、5 世紀以降、東広島市の三ツ城第 1 号古墳に比肩するだけの墳丘規模をもつ古墳が造営されなかったことからすると、勢力は次第に縮小したものと推定される。

この後、西岸側では大町七九谷古墳（村田編 1999）、白山第 1 号古墳（鹿見ほか 1973）、三王原古墳（中田 1973）、池の内第 2 号古墳（池の内第 2 号古墳発掘調査団 1985）、空長第 1 号古墳（石田編 1978）、寺山第 3 号古墳（高下編 1997）などが造営される。三王原古墳は円墳であつたらしく、ここからは獸形鏡 1、鉄製短甲 1、鉄刀 1、鉄剣 4、鉄銚 2、鉄鉈 1、鉄鏃 10、玉類 10、馬具飾金具などが出土した。空長第 1 号古墳からは、鉄剣 1、蛇行剣形鉄製品 1、金銅製三輪玉 1、滑石製有孔円盤 1、ガラス小玉 11、銚 5 が出土した。白山第 1 号古墳は箱形石棺を埋葬施設とし、短甲などが出土したと伝えられる（藤澤 2020）。いずれにしても、いくつか鉄製品を大量に副葬する古墳が認められる。なお、東岸の中小田第 2 号古墳でも、小規模ではありながらも竪穴式石槨を埋葬施設とし、副葬品も傑出した内容を誇っており、それまで首長墓の系譜が追えた同一丘陵上に継続的に造営されていることからみても、太田川下流域での優位を引き続き保ち続けたものと考えられる。

その後、古墳時代後期には、中小田第 1 号古墳南側 700 m に、全長約 28 m の前方後方墳と考えられる湯釜古墳が造営された。初期の横穴式石室を埋葬施設としており、6 世紀前半と考えられる（妹尾 1985）。後期古墳の副葬品については、中国から舶載された鏡などにかわって玉類・耳環などの装身具、馬具・多量の供献用の土器類が多くなる。死後の生活を想定した葬送品が主要な位置を占めるようになり、葬送観念の変化がうかがわれる。



第2図 地形図 (S = 1/2,000)

## 参考・引用文献

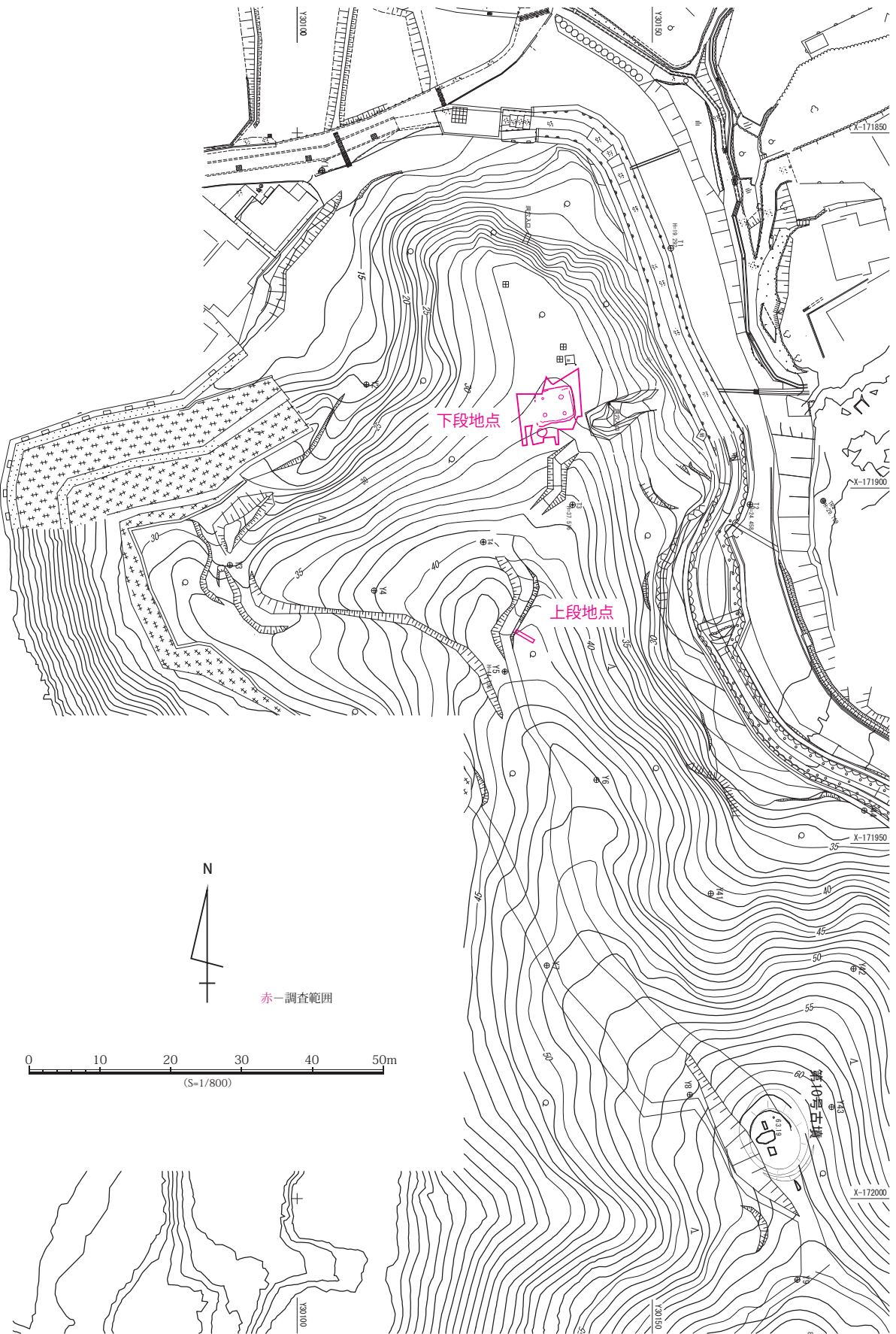
- 荒川正己編 1998 『梨ヶ谷遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
- 池の内第2号古墳発掘調査団 1985 『池の内第2号古墳発掘調査現地説明会資料』
- 石井隆博・角田徳幸 1995 「山武士塚古墳の測量調査」『芸備』第24集 芸備友の会
- 石田彰紀編 1978 『空長古墳群発掘調査報告書』(広島市の文化財第13集) 広島市教育委員会
- 石田彰紀編 1982 『高陽台遺跡群発掘調査報告』(広島市の文化財第21集) 広島市教育委員会
- 石田彰紀編 1983 『弘住遺跡発掘調査報告』(広島市の文化財第25集) 広島市教育委員会
- 石田彰紀 1991 「歴史のあけぼの」『中山村史』 広島市役所
- 小都隆・脇坂光彦 1977 「IV 調査の遺跡 4 山手遺跡群」金井亀喜編 『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会
- 金井亀喜編 1974 『西願寺遺跡群』広島県教育委員会
- 河瀬正利 1979 「歴史のあけぼの」『高陽町史』 広島市役所
- 高下洋一編 1997 『寺山遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
- 高下洋一編 2004 『史跡中小田古墳群遺構状況確認調査報告』財団法人広島市文化財団
- 小清水圭子ほか 1986 「神宮山第1号古墳・第3号古墳の測量調査成果報告」『続トレンチ』第6巻第4号  
広島大学文学部考古学研究室続トレンチ編集委員会
- 潮見浩 1960 『広島市牛田町早稲田山遺跡の発掘調査報告』(「広島考古学研究」第2号)
- 潮見浩編 1980 『中小田古墳群』(広島市の文化財第16集) 広島市教育委員会
- 鹿見啓太郎ほか 1973 『白山城跡発掘調査報告』広島県教育委員会
- 妹尾周三 1985 「広島市安佐北区湯釜古墳について」『芸備』第16集 芸備友の会
- 妹尾周三 1987a 「大明地古墳群」植田千佳穂・妹尾周三編 『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』  
(IV) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
- 妹尾周三 1987b 「大久保古墳」植田千佳穂・妹尾周三編 『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(IV)  
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
- 中田昭 1973 「広島市祇園町三王原古墳について」『芸備』第1集 芸備友の会
- 中田昭 1977 「恵下古墳群」金井亀喜編 『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』  
広島県教育委員会
- 中田昭・松村昌彦 1977 「真亀第1号・第2号古墳」金井亀喜編 『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財  
発掘調査報告』広島県教育委員会
- 桧垣栄次・佐伯邦芳 1977 「IV 調査の遺跡 8 諸木遺跡群」金井亀喜編 『高陽新住宅市街地開発事業地内  
埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会
- 平田太・高下洋一 2021 『史跡中小田古墳群総括報告書』広島市教育委員会・公益財団法人広島市文化財団
- 広島大学大学院文学研究科考古学研究室 2002 『宇那木山第2号古墳発掘調査報告会資料』
- 広島大学大学院文学研究科考古学研究室ほか 2003 『安芸の古墳文化探訪～1700年前の広島にタイムスリッ  
プ～』
- 藤澤昌弘 2020 「広島市白山第1号古墳出土の短甲について」『広島大学大学院文学研究科 考古学研究室紀要』  
第11号 広島大学大学院文学研究科考古学研究室
- 松村昌彦 1977 「IV 調査の遺跡 1 地蔵堂山古墳群」金井亀喜編 『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文  
化財発掘調査報告』広島県教育委員会
- 村田亜紀夫編 1999 『大町七九谷遺跡群』財団法人広島市文化財団
- 村田亜紀夫・高下洋一 2001 『長尾古墳群発掘調査報告』広島市教育委員会
- 本村豪章 1960 「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」『広島考古研究』第2号 広島考古研究会

X-17185

X-17190

X-17195

X-17200



第3図 発掘調査範囲図 (S = 1/800)

### Ⅲ 遺構と遺物

#### 1 調査の概要

中小田古墳群は、標高 331.5 m の最高所から北西に延びる標高約 60 m から約 120 m までの丘陵尾根上に位置する。この丘陵は稜線が狭く、傾斜も比較的強い。随所に花崗岩の露頭が見られ、自然地形を最大限に利用して古墳は築造されている。古墳群の最北に位置する第 10 号古墳からさらに北方に史跡範囲は延びるが、標高約 50 m 付近から尾根軸線は北方向と、西方向に派生する。この尾根の軸線一帯は昭和 55（1980）年報告において「弥生土器散布地」として位置付けられている（潮見 1980）。

今回計画された史跡中小田古墳群整備工事に伴い設置される管理用道路は、この「弥生土器散布地」と位置付けられている範囲のうち、北方向の尾根軸線上に位置する。当該軸線は、傾斜の緩い尾根から、標高約 48 m を境に急斜面となり、標高約 33 m 付近において平坦面を形成する。管理用道路の設置に当たっては、設計上、現地形を掘削する範囲と、盛土を施す範囲が設定されている。本発掘調査は、前者の掘削する範囲を対象として実施したもので、すなわち、史跡範囲北端にあたる標高約 33 m からの平坦面上と、直線距離にして約 35 m 南側に位置する先述した標高約 48 m の傾斜変換点付近の平坦面がそれに当たる。前者を「下段地点」、後者を「上段地点」と称する。

下段地点の平坦面上については、既に平成 15（2003）年に実施した遺構状況確認調査において設置した 12.5 m × 1 m のトレンチから、弥生時代の住居跡の可能性のある掘り込み痕跡を確認している（広島市文化財団 2004）。

本発掘調査の結果、下段地点において、傾斜変換点から北側平坦面にかけて、住居跡 1 軒（以下、「SI1」とする。）と、その約 0.35 m 南側の位置に土坑 1 基（以下、「SK1」とする。）を確認した。遺構内床面及び埋土中から土器・石器・鉄製品が出土したほか、調査区内堆積土などから上方からの流れ込みのほか、再堆積と考えられる土器片・石器・鉄製品が出土した。

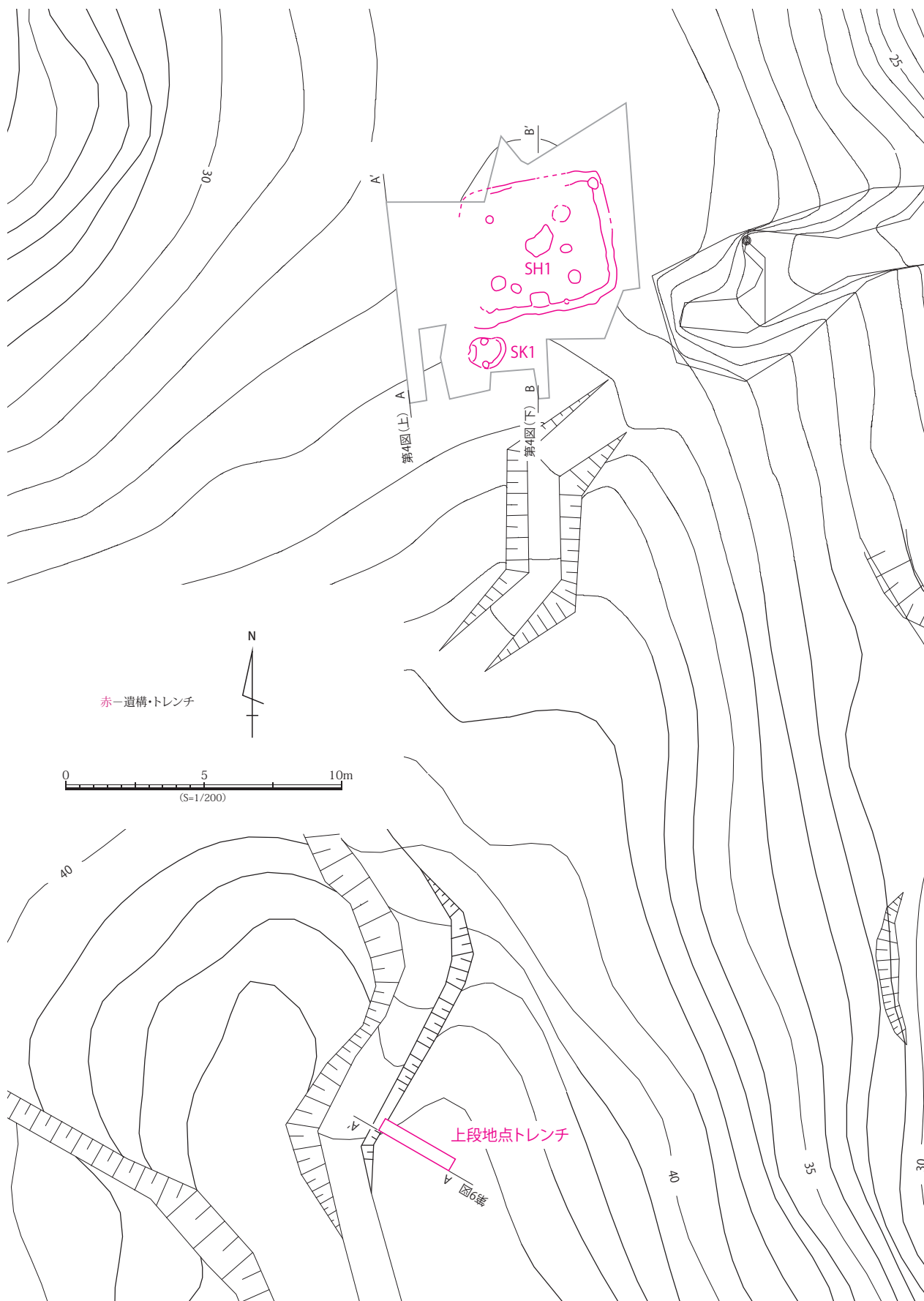
上段地点においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。

ちなみに、平成 15（2003）年に実施した確認調査では、設置したトレンチから土器細片・砥石・鉄製品（袋状斧）が出土している（広島市文化財団 2004）。

#### 2 基本層序

下段地点において確認された遺構は、花崗岩質の地山面を掘り込んで構築されている。ただし、遺構の残存状況から後世の地形削平が行われたことは確実である。本来の地山面は現状よりも相当上部に位置していたことが考えられる。参考となるのが、平成 29（2017）年度に実施した第 11 号古墳遺構状況確認調査 T 2018 - 3 において確認された住居跡である（平田・高下 2021）。この位置は現地地形観察から円形状に窪みが確認でき住居跡の存在が予測され、周辺地形は後世の影響を受けていないことが予想された。確認調査の結果、土層観察によれば住居内において攪乱が認め





第5図 遺構配置図 (S = 1/200)

### 3 遺構

#### (1) 下段地点

##### ○SI1 (第6・7図・図版3～5)

傾斜変換点から北側に広がる尾根平坦面にかけて位置する。遺構の上面並びに西側は削平を受けており、残存状況は良好とはいえない。

平面形状は隅丸長方形で、床面の規模は南北方向で約4.2m、東西方向は西側壁面が削平されているが、柱穴と壁面との距離から、約5mと推定される。床面の標高は概ね32.3mである。壁高は、南側が最高所となり約32cmで、東側は最高所で約5cm、北側は最高所で約15cmである。壁溝は削平をうけている西側の状況は不明であるが、そのほかの三辺においては残存しており、幅20～40cm、深さ5～10cmである。

床面からは合計7個のピットを確認した。このうちSP1～SP4が、規模とプランとの位置関係から、支柱穴と考えられる。規模はSP1が底面直径20cm深さ54～57cmで、SP2が底面直径22cm深さ63cmで、SP3が底面直径15cm深さ41～43cmで、SP4が底面直径20cm深さ63cmである。柱間距離は、SP1－SP2では約270cm、SP3－SP4では約260cm、SP1－SP3では約230cm、SP2－SP4では約240cmである。SP2－SP4間ではSP5が確認されたが、SP1－SP3間では精査したものの確認できなかった。SP5は底面直径18cm深さ40cmである。SP1の東に近接した位置でSP6、北東隅部からSP7が確認された。それぞれの規模は、底面直径15～20cm深さ15cm、底面直径20～25cm深さ15cmである。支柱穴以外のピットの機能は不明である。

床面の中央部において、不定形の掘り込みを確認した。壁面の一部には赤変化が確認されたことから炉跡と推定されるが、炭化物は認められなかった。規模は、南北90cm、東西120cm、深さ23～24cmである。南側壁溝中央には東西65cm南北45cm深さ12cmの方形の掘り込みが認められたが、壁溝との土層の違いは認められず、一体で機能していたと考えられる。

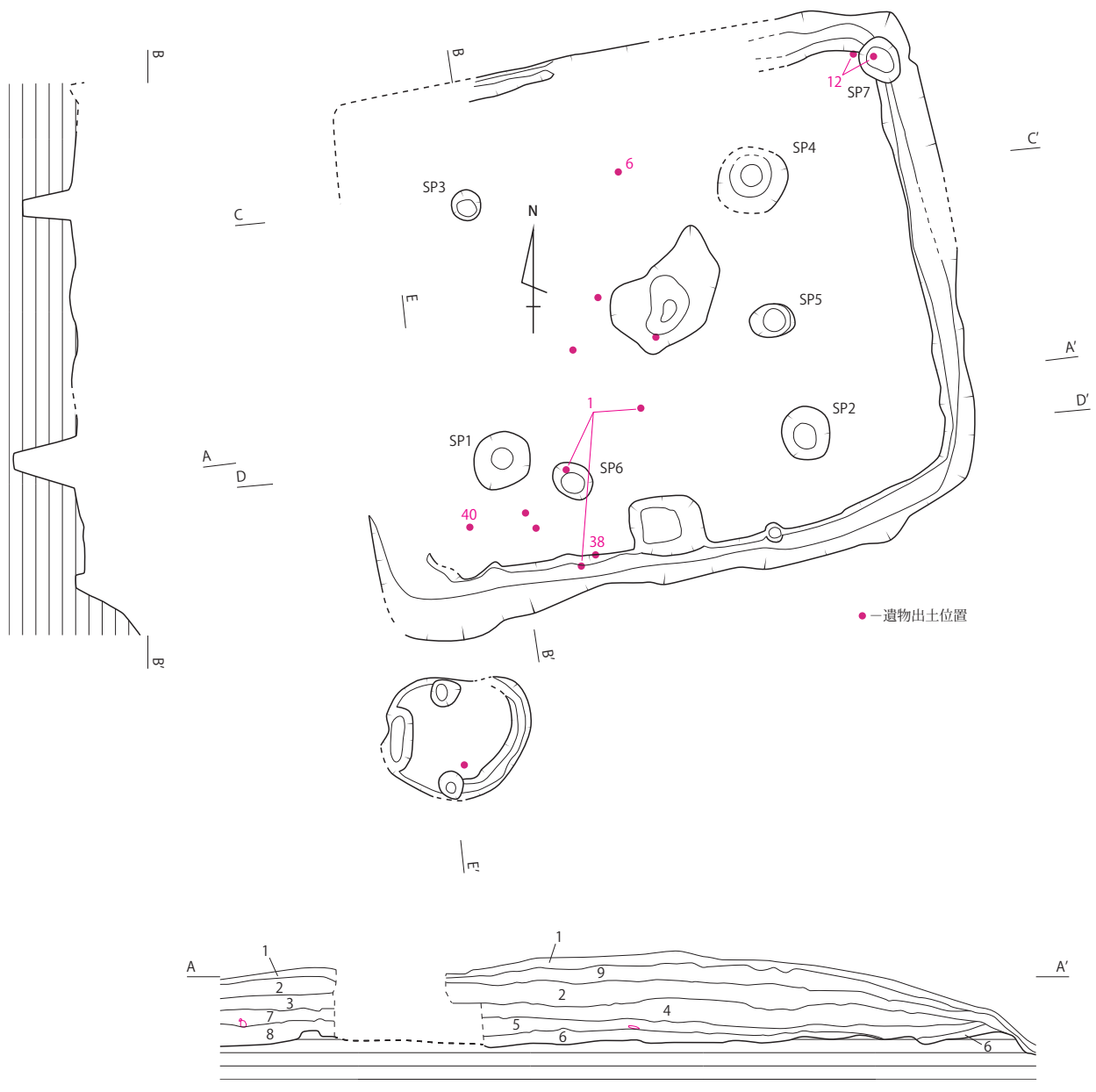
床面のほか、SI1埋土土層中から、主に南西箇所、北東箇所を中心に、土器1～14のほか、石器36(砥石)、鉄製品38～40が出土している。

##### ○SK1 (第8図・図版6)

SI1の約0.35m南側に位置する。先述のとおり、現状の規模から、上面は大きく削平を受けており、旧地形では傾斜変換点の位置はもう少し南上方だったと推測される。このことから旧地形では、本遺構周辺は平坦な地形であったと考えられる。

平面形態は南北方向よりも東西方向が長い楕円形である。底面の規模は長径120cm、短径100cm、深さは最大約50cmで、底面の標高は33.1mである。断面形状はややフラスコ形を呈し、その形状から貯蔵穴と推定される。底面北側を除く東西の壁ぎわに幅約20cm、深さ7.5cmの溝が巡るほか、南側と北側に、それぞれ直径20cm深さ21cm、直径25cm深さ18cmのピットを確認した。溝は湿気防止と推測されるが、ピットについてはその機能は不明である。

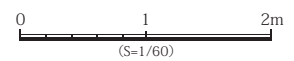
本遺構の床面及び南側ピット内のほか、埋土中から土器15が出土している。



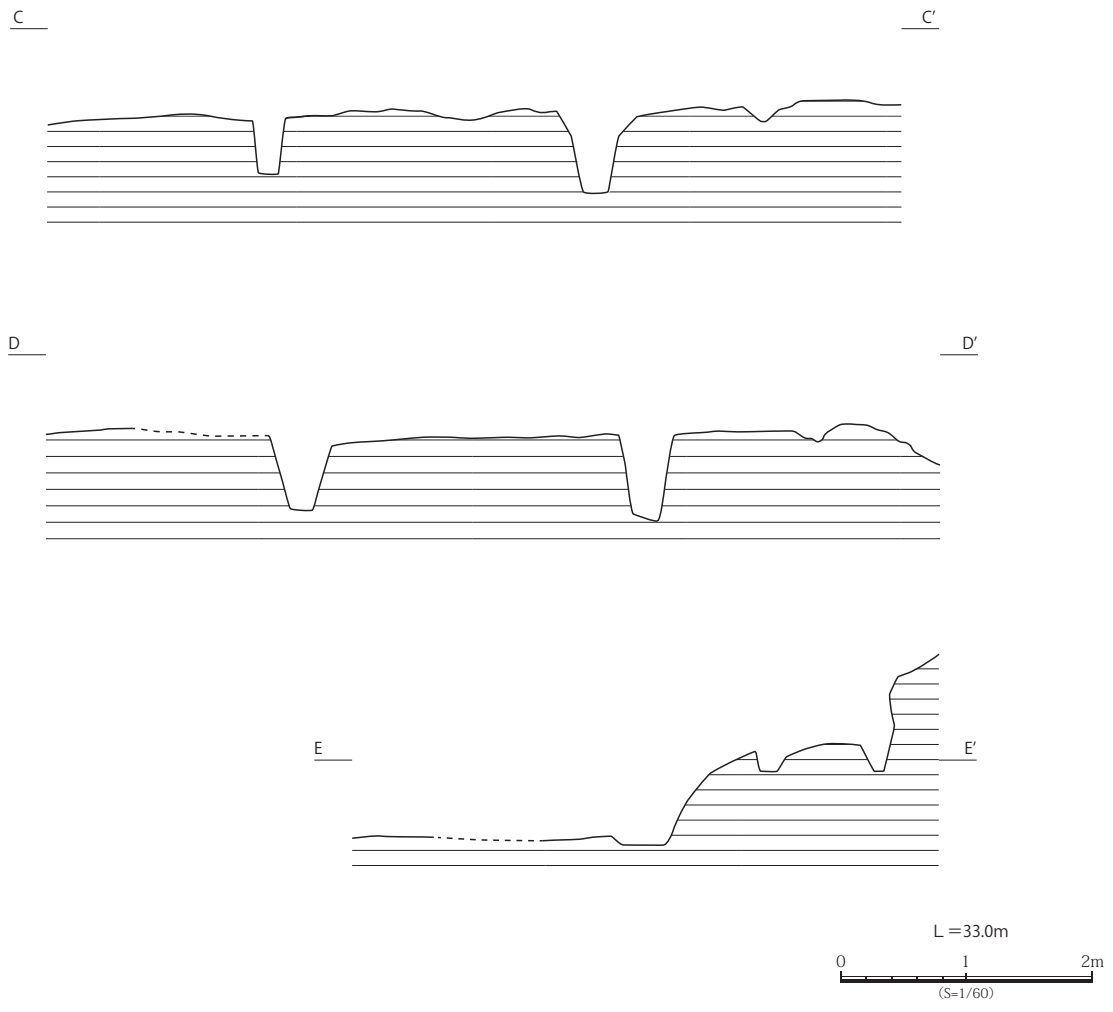
土層説明

- |                      |                                 |
|----------------------|---------------------------------|
| 1 表土(腐葉土)            | 6 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土 遺物包含層(住居内) |
| 2 にぶい黄褐色(10YR7/4)砂質土 | 7 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土            |
| 3 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土 | 8 褐色(10YR4/4)砂質土 遺物包含層          |
| 4 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土 | 9 にぶい黄褐色(10YR7/3)砂質土            |
| 5 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土 |                                 |

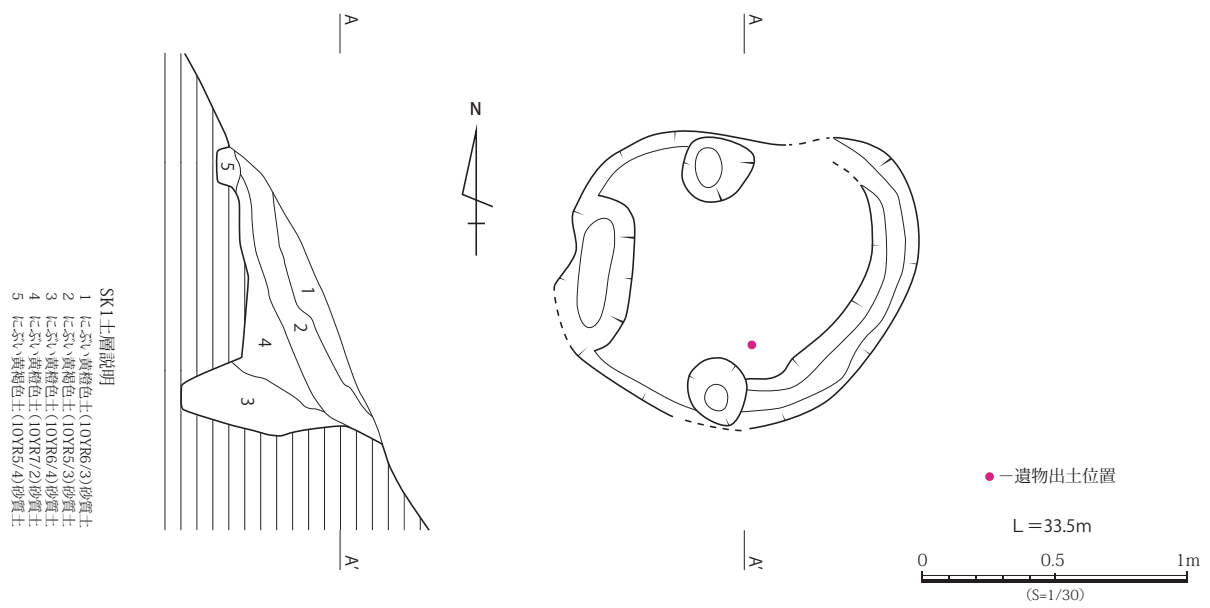
L = 33.0m



第6図 SI1 実測図 (S = 1/60)



第7図 SI1 エレベーション図 (S = 1/60)

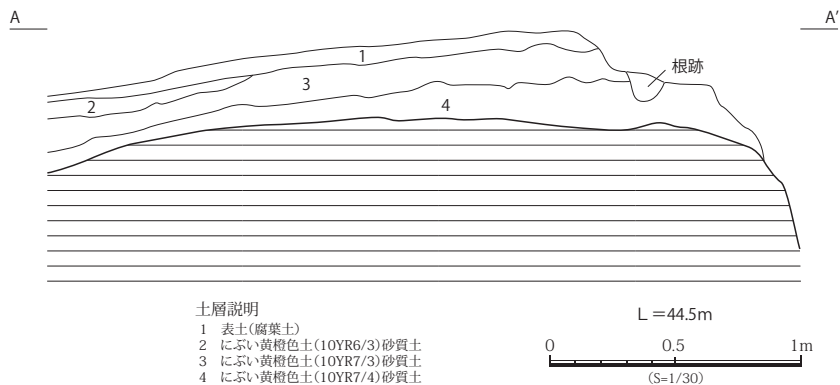


- SK1土層説明
- 1 棕色土 (10YR6/3) 砂質土
  - 2 棕色土 (10YR5/3) 砂質土
  - 3 棕色土 (10YR6/4) 砂質土
  - 4 棕色土 (10YR7/2) 砂質土
  - 5 棕色土 (10YR5/4) 砂質土

第8図 SK1 実測図 (S = 1/30)

## (2) 上段地点 (第9図・図版7)

第10号古墳が位置する尾根裾から、再度傾斜が変わる標高約48m地点まではなだらかな尾根筋が北方向に延びる。その先端部においても掘削範囲となっており、南北1m、東西2.85mのトレンチを設置し、遺構状況確認調査を実施した。調査の結果、現地表から30～35cm下に地山を確認した。堆積土は、最上層の腐葉土を除き、にぶい黄橙色の砂質土層からなる。混入する砂粒の若干の違いにより分層したが、ほぼ同一層と判断される状況であった。炭化物は含まず、土器等の遺物の出土も認められなかった。このことから、本地点においては遺構の存在は認められないと判断した。よって、拡張は行わず、これをもって上段地区の調査を完了した。



第9図 上段地点トレンチ土層断面図 (S = 1/30)

## 4 遺物

下段地点で出土した遺物の大半は小片であり、復元可能なものは少ない。器形が判別可能なものを中心に可能な限り図化した。

SI1内から出土した遺物には土器1～14のほか、石器36(砥石)、鉄製品38～40が、SK1内から出土した遺物には土器15がある。遺構に伴わない遺物として、土器16～35、石製品37、鉄製品41がある。

各遺物の詳細については、遺物観察表に譲り、ここでは主な特徴や年代のほか、特筆すべきものについて記す。

### ○遺構に伴う遺物群 (第10図1～15、36、38～40・図版8、9、12)

SI1内から出土した土器は、小片が多く図化できていない煮炊き用や貯蔵用の甕や壺に加えて、高坏や小型精製器種が一定数量含んでいることが特徴である。1～5、7は高坏に分類される。1は受部と底部の境に稜を設ける有稜高坏であり、3も同類に該当する可能性がある。2は坏底部の破片で、円盤充填したのち充填部裏側を先端が尖った工具で刺突している。7は脚部の破片で、精良な胎土を素材とする。4・5は坏口縁端部を上方に屈折させる。器面調整から傾きを決定したが、両者は別個体と推定される。在地系高坏にも口縁端部を上方に内傾させる例があるが、器壁の薄さや端部の処理の仕方のほか、胎土も含め、両者には若干の差異が認められる<sup>1)</sup>。この2点は比較的精良な胎土を有しており、有段高坏の坏口縁部の可能性がある。11は高坏の脚部と推定される。

6は精良な胎土を素材とし、鉢若しくは高坏坏部の破片と推定される。8、12～14はいわゆる小型精製器種に該当するものである。いずれも砂粒をほとんど含まない精良な胎土を用いている。13は低脚碗形高坏の坏部である。横方向の細かいミガキを施す。13及び14は同一個体である可能性がある。12は類例が少なく、碗形の中央に直径2.6cm、高さ1.4～1.6cmの筒形の粘土帯が付くもので、これをつまみと判断した。素材胎土から精製器種と判断した。9は器種不明なものである。片側の端部はやや屈折させ丸味を呈するもので、もう片側の端部は接合面と判断した。器形の傾きから掲載図のようにハの字状に開く「脚部」として図化した。内側には黒色タール状物質（漆か？）が塗布されている（図版9 9顕微鏡写真）。

これらの出土遺物のうち、特に精製器種は在地の土器に系譜が追うことができない。精製器種については、古墳時代初頭の畿内地域を中心に分布する布留式土器の構成をなすとして古くから知られているが、比較的砂粒を含む粘土を使用し、縦方向の幅広匙面状のヘラミガキを施すA群と、著しく精良な粘土を使用し横方向に細かなヘラミガキを施すB群に大別できるとされる（次山1993、田中2005）。また、精製器種B群については、吉備南部地域からの、技術上の諸要素及び工程における具現化が指摘されている（次山1993）。SI1から出土した精製器種は、概ね精良な胎土を使用し横方向に細かいミガキを施す特徴を有することから、精製器種B群に該当するものと考えられる。以上から、SI1出土精製器種は、畿内地域若しくは吉備南部地域からもたらされたものと推測される。

SI1から出土した精製器種の時期については、技術上の諸要素等から時間的に先行するとされる吉備南部地域における編年では、河合忍氏による古墳1期～古墳2期に位置付けられる。ちなみに、古墳1期は畿内地域における庄内2・3式、古墳2期は布留0式（古）との併行関係にあたりとされている（河合2021）。この時期については、若島一則による広島湾頭の弥生時代後期～古墳時代初頭の土器編年（以下、「若島編年」とする。）によれば、古墳時代初頭に相当するⅢ-1に位置付けられるものである（若島2002）<sup>2)</sup>。

出土した鉄製品のうち、種類が判明した38・39は、いずれもいわゆる定角式である。太田川流域では、安佐北区岩上山田遺跡（大崎1988）や安佐北区上深川北遺跡（高下1991）に類例があり、若島編年によるⅢ-1期の土器と共伴することから、古墳時代初頭に位置付けられ、本住居と時間的差異はないものと判断される。

SK1から出土した土器15は、埋土中から出土したものであるが、若島編年のⅢ-1段階のものである。ただし、これについては本遺構に伴うものか疑問が残る。細片のため図化できていないが、若島編年のⅡ-2期に位置付けられる土器片が南側ピット内から出土しており、SK1はSI1よりも先行して構築された可能性がある。

#### ○遺構に伴わない遺物群（第10図16～35、37、41・図版10～12）

遺構に伴わない遺物は、先述のとおり、上方からの流入土のほか、削平された遺構内堆積土が再堆積したと考えられるものと考えられる。いずれがどちらかに属するのかは不明であるが、29は精製器種であり、本来は住居跡に伴う可能性が高い。その他にも該当例がある可能性はあるが、本

報告ではすべてを遺構に伴わない遺物として掲載した。

29を除き、16～35は、多くはいわゆる太田川下流域で一般的な弥生時代後期中葉～古墳時代初頭の土器群である。先述のとおり削平された後に堆積した土層中からの出土である。上方向からの流入土の場合は、SI1の約10m南上方に比較的広い平坦面が北西方向にむかって位置しており、この位置に遺構が存在していたことが想像される。20～24は若島編年のⅡ2-①期～Ⅱ2-③期に該当し、弥生時代後期中葉から終末にかけての時期、16～18、25はⅢ-1に該当し、古墳時代初頭の時期である。高坏29は口縁端部を上方に屈折させるものである。胎土は精良な胎土を素材とするもので、先述のとおり本来は住居に伴っていたものと推定される。

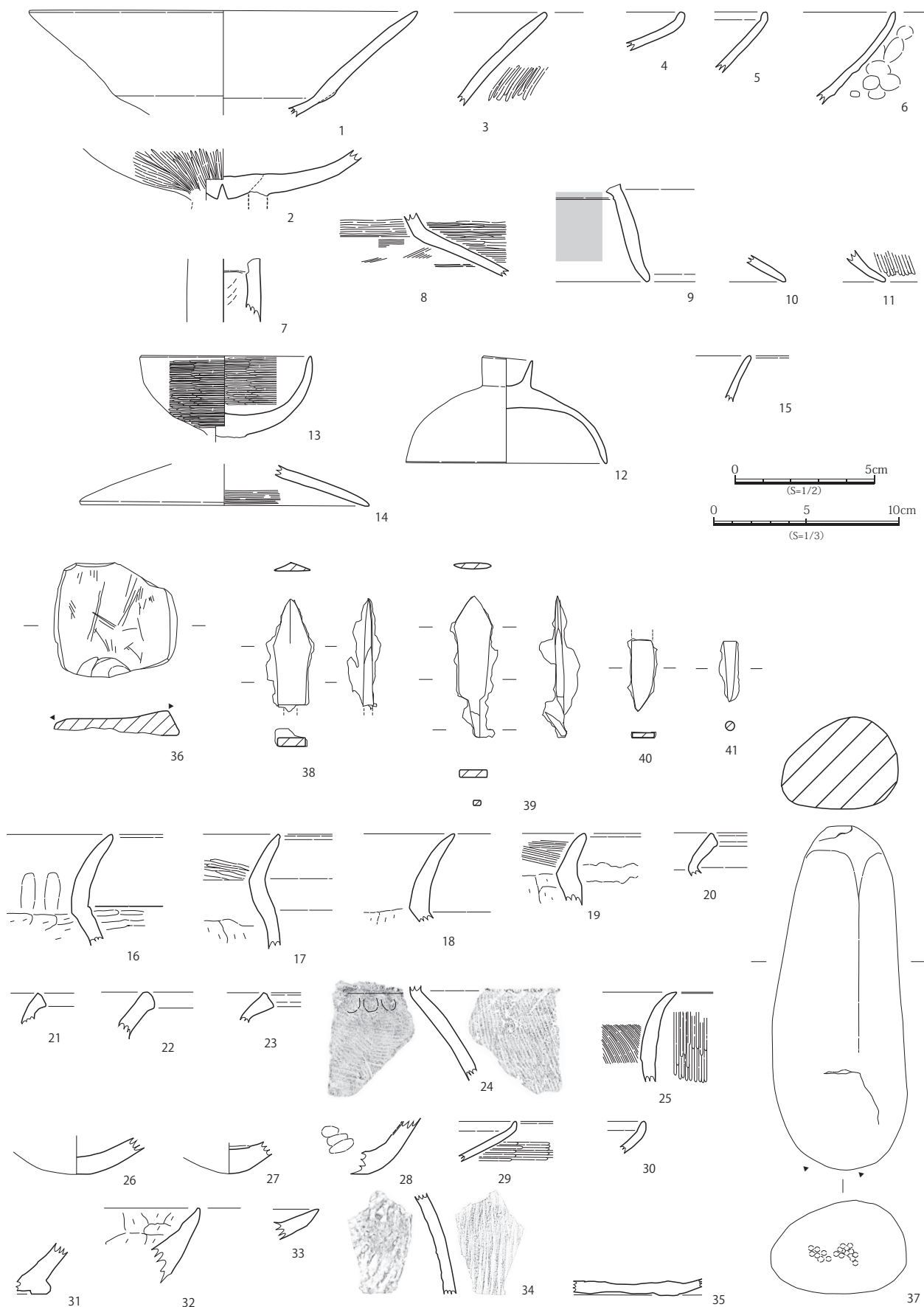
そのほか特徴的なものとして、32、33は、時期不明の皿状の器種である。このうち32は表面に糊圧痕が確認できた(図版11-32顕微鏡写真)。また、須恵器が2点出土している。それぞれ時期の比定は難しいが、35は坏か碗の破片で、高台を持たないものであり、8世紀以降の時期に位置付けられる。古墳群の時期とは大きく隔たりがあるがこの時期まで土地利用がなされた証左資料として掲載した。

#### 注

- (1) 類似事例としては、安佐南区池の内遺跡(若島ほか1985、報告書第35図11)、同寺山遺跡(高下編1997、報告書第27図34)、佐伯区倉重向山遺跡(稲葉編1991、報告書第13図6、第14図7、第16図27)、城ノ下A地点遺跡(若島編1991、報告書第62図44)などがある。若島編年では、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期にあたる、Ⅱ-3期～Ⅲ-1期に位置付けられる。
- (2) 広島市内の住居内からの精製器種出土事例は、安佐南区国重城遺跡が知られるのみである。住居跡内から碗形高坏が出土している(幸田ほか1982)。ちなみにこの土器は精良な胎土で、横方向に細かなヘラミガキを施す精製器種B群に該当する。なお、この土器の時期は、共伴した在地系の土器から、若島編年のⅢ-1期に位置付けられる。

#### 引用・参考文献

- 稲葉瑞穂編1991『倉重向山遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団  
大崎省吾編1988『岩上山田遺跡発掘調査報告』広島市教育委員会  
河合忍2021「吉備南部の精製器種群と布留式土器との関係について—弥生時代後期中葉～古墳時代前期前葉土器の分析から—」『古墳出現期土器研究』第8号 古墳出現期土器研究会  
高下洋一1991『上深川北遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団  
高下洋一1997『寺山遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団  
潮見浩編1980『中小田古墳群』(広島市の文化財第16集)広島市教育委員会  
田中元浩2005「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号 有限責任中間法人日本考古学協会  
次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第2号(158号) 考古学研究会  
平田太・高下洋一2021『史跡中小田古墳群総括報告書』広島市教育委員会・公益財団法人広島市文化財団  
幸田淳ほか1982『国重城跡発掘調査報告』広島市教育委員会  
若島一則ほか1985『池の内遺跡発掘調査報告』広島市教育委員会  
若島一則編1991『城ノ下A地点遺跡発掘調査報告書』財団法人広島市歴史科学教育事業団  
若島一則2002「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌』I 平成13年度財団法人広島市文化財団



第 10 图 下段地点出土遺物実測図  
(1 ~ 35 : S=1/3, 36 ~ 41 : S=1/2)

第1表 土器観察表

単位は cm、[ ] は復元値

番号	器種	出土位置	寸法	器形	調整・成形	備考
1	高環	SI1 南西区床面 埋土	口径 [20.7]	坏部は逆ハの字状に外反気味に ひらき、端部は尖り気味におさ める。受部と底部の境に粘土を 貼付け稜を設ける	内外面ともなで仕上げ	胎土：0.5mm 大の砂粒（長石・石英） を多く含む 焼成：あまい 色調：にぶい橙色
2	高環	SI1 南西区埋土	推定脚径 4.0	底部はやや平らで受部は内傾気 味に立ち上がる。底部は円盤充 填で中央を塞ぎ、充填部裏側に 刺突痕	外面：縦方向ミガキ仕上げ 内面：なで仕上げ	胎土：0.5mm～1mm 大の砂粒（長 石・石英）を多く含む 焼成：あまい（器面剝離が顕著） 色調：にぶい黄橙色
3	高環	SI1 南東区埋土	—	坏部はハの字状にひらき、端部 は丸くおさめる	外面：縦方向のミガキ仕上げ 内面：なで仕上げ	胎土：砂粒（長石・石英）雲母片含 む 焼成：良好 色調：にぶい橙色
4	高環*	SI1 北西区埋土	—	口縁は内傾気味にひらき、端部 は上方に屈折させ丸くおさめる	内外面ともなで仕上げ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：橙色
5	高環	SI1 北西区埋土	—	口縁は内傾気味にひらき、端部 は上方に屈折させ丸くおさめる	内外面ともなで仕上げ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：にぶい橙色
6	鉢か高環	SI1 北西区埋土	—	口縁は内傾気味にひらき、端部 は上方に僅かに屈折させ尖り気 味におさめる	内外面ともなで仕上げ、外面 には指頭圧痕	胎土：精緻 焼成：良好 色調：橙色
7	高環	SI1 北西区埋土	脚径 [3.9]	脚部の破片で、円筒状を呈する	内外面ともなで仕上げ 内側に絞り痕跡	胎土：精緻、僅かに砂粒（長石）を 含む 焼成：ややあまい 色調：橙色
8	高環*	SI1 南西区埋土	—	脚部は明瞭な段を呈し、ハの字 状に直線気味に広がる	外面：横方向ヘラミガキ痕 内面：横方向の板状工具によ る仕上げ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：橙色
9	不明	SI1 北西区埋土	—	ハの字状にひらき、端部は若干 外側に屈折させる	内外面ともなで仕上げ 内側に黒色塗料（漆？）	胎土：精緻、僅かに砂粒（長石）を 含む 焼成：良好 色調：黄橙色
10	高環	SI1 北西区埋土	—	直線的にひらき、端部は尖り気 味におさめる	内外面ともなで仕上げ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：橙色
11	高環	SI1 南東区埋土	—	やや外反気味に、ハの字状にひ らき、端部は丸みを持たせる	外面：縦方向のミガキ仕上げ 内面：横方向のなで仕上げ	胎土：砂粒（長石・角閃石）含む 焼成：良好 色調：にぶい橙色
12	蓋*	SI1 北東区床面	口径 10.8 器高 5.7	天井部は丸く、口縁部は内傾気 味に下り、端部は尖り気味にお さめる 天井部に円筒状のつまみ	内外面とも丁寧なミガキ仕上 げ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：明赤褐色
13	高環*	SI1 北東区埋土	口径 9.1	口縁は内傾気味に立ち上がり、 端部はやや尖り気味におさめる	内外面とも丁寧な横方向のミ ガキ仕上げ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：橙色
14	高環*	SI1 北東区埋土	脚径 [15.5]	ハの字状に直線的にひらき、端 部は丸くおさめる	外面：なで仕上げ 内面：板状工具による仕上げ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：橙色

番号	器種	出土位置	寸法	器形	調整・成形	備考
15	甕	SK1 埋土	—	口縁は逆ハの字状にひらき、端部はやや尖り気味におさめる	内外面ともなで仕上げ	胎土：砂粒（長石・石英）、雲母片を含む 焼成：あまい 色調：にぶい黄橙色
16	甕	調査区 南西区	—	口縁は強く外反し端部は少し丸みを呈する。肩部はあまり張らない	口縁は内外面ともなで仕上げ 体部外面はヘラ状工具によるなで仕上げ 内面はヘラ削り仕上げ	胎土：砂粒（2～3mm 大の石英、長石）含む 焼成：良好 色調：赤褐色
17	甕	調査区 南西区	—	口縁は直線的に外反し端部は尖り気味におさめる。肩部はあまり張らない	外面：なで仕上げ 内面：口縁は斜め方向のミガキ仕上げ、体部のヘラ削りは口縁との境まで延びない	胎土：砂粒（長石・石英）を含む 焼成：良好 色調：褐色
18	甕	調査区 南西区	—	口縁は強く外反し、端部は尖り気味におさめる	口縁は内外面ともなで仕上げ 体部はヘラ削り仕上げ	胎土：砂粒（長石）を含む 焼成：良好 色調：赤褐色
19	甕	調査区 南西区	—	口縁は短く逆ハの字状にひらき、端部は丸味を呈する。肩部はあまり張らない	外面：なで仕上げ 内面：口縁は斜め後方の板状工具による調整、体部はヘラ削り仕上げ	胎土：砂粒（長石・石英）を含む 焼成：良好 色調：明赤褐色
20	甕	調査区 南西区	—	口縁は逆ハの字状に外反し、端部は面をもち少し凹味を呈する	内外面ともなで仕上げ	胎土：わずかに砂粒（長石・石英）を含む 焼成：良好 色調：褐色
21	甕	調査区 南東区	—	外反させてひらく口縁で、端部は面を持たせる	内外面ともなで仕上げ	胎土：砂粒（長石・石英）を含む 焼成：良好 色調：明赤褐色
22	甕	調査区 北東区	—	口縁は逆ハの字状に外反し、端部はわずかに肥厚させる	内外面ともなで仕上げ	胎土：砂粒（長石）を多く含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色
23	甕	調査区 北西区	—	口縁は逆ハの字状に外反し、端部はわずかに肥厚させる	内外面ともなで仕上げ	胎土：砂粒（長石・石英）を含む 焼成：良好 色調：にぶい橙色
24	甕か壺	調査区 南西区	—	あまり張らず斜め直線的な肩部を呈す	外面：斜め方向の板状工具による調整ののち刺突による施文 内面：横方向の板状工具による調整、上部に指頭圧痕	胎土：砂粒（長石・石英）を含む 焼成：良好 色調：暗赤褐色
25	壺？	調査区 南西区	—	口縁は直線的に立ち上がり、端部は外反させ、尖り気味におさめる	外面：縦方向のヘラミガキ調整 内面：斜め方向の刷毛目が残る	胎土：砂粒（長石・石英・角閃石）含む 焼成：良好 色調：にぶい燈色
26	不明	調査区 南西区	—	丸味を呈する底部	内外面ともなで仕上げ	胎土：砂粒（長石・石英・角閃石）を含む 焼成：良好 色調：外面明赤褐色、内面にぶい黄橙色
27	不明	調査区 南西区	—	尖り気味な底部	内外面ともなで仕上げ 内面に指頭圧痕	胎土：1mm 大の砂粒（長石・石英）を含む 焼成：あまい 色調：外面明赤褐色、内面灰黄褐色

番号	器種	出土位置	寸法	器形	調整・成形	備考
28	不明	調査区 南西区	—	わずかに底部をもたせる	外面：なで仕上げ 内面に指頭圧痕	胎土：砂粒（長石・石英）を含む 焼成：ややあまい 色調：明赤褐色
29	高環*	調査区 南西区	—	端部は上方に屈折させ、丸味をもたせおさめる	外面：横方向にミガキ仕上げ 内面：丁寧ななで仕上げ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：明赤褐色
30	高環	調査区 南西区	—	端部は上方に屈折させ、丸味をもたせおさめる	内外面とも丁寧ななで仕上げ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：にぶい橙色
31	不明	調査区 南東区	—	台形状の台部を付着させる	内外面ともなで仕上げ	胎土：砂粒（5mm 大の長石ほか石英）を含む 焼成：良好 色調：にぶい褐色
32	皿？	調査区 北東区	—	肥厚した体部から口縁は逆ハの字状に開き、端部は丸味をもたせる	外面：なで仕上げ 内面：ヘラ削り仕上げ	胎土：砂粒（長石・石英・雲母片）を含む 焼成：良好 色調：褐色 *外面に粉殻圧痕
33	皿？	調査区 南西区	—	口縁は内傾させ、端部は尖り気味におさめる	内外面ともなで仕上げ 外面に指頭圧痕	胎土：砂粒（5mm 大の石英ほか長石・角閃石）含む 焼成：良好 色調：外面黒褐色、内面明赤褐色
34	甕か壺	調査区内 北西区	—		外面：タタキ仕上げ 内面：宛て具痕跡（所謂青海波紋）	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰色
35	坏か椀	調査区内 北西区	—	底部はほぼ平面	外面：粘土切り離し後なで仕上げ 内面：ロクロなで仕上げ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰色

\*：精製器種といわれるもの

第2表 石製品観察表

単位は cm、[ ] は復元値

番号	種別	出土位置	長さ	最大幅	断面厚	重量 (g)	備考
36	砥石	SI1 南東区埋土	[4.0]	4.4	0.9	17.9	破片・使用面は1面か 流紋岩（デイサイト質溶結凝灰岩）
37	叩石	調査区 南西区埋土	12.3	4.9	3.3	284.3	叩打痕 流紋岩（デイサイト質溶結凝灰岩）

第3表 金属製品観察表

単位は cm、[ ] は復元値

番号	種別	出土位置	長さ	最大幅	厚	重量 (g)	備考
38	鍬	SI1 南西区床面	[3.8]	1.35	0.3	7.57	定角式 茎欠損
39	鍬	SI1 北東区床面	[4.8]	1.4	0.25	6.97	定角式
40	茎？	SI1 南西区	[2.5]	0.8	0.2	2.54	
41	茎？	調査区 南西区埋土	[2.2]	0.5	0.5	1.33	

## IV まとめ

本発掘調査は、史跡中小田古墳群整備に伴い設置される管理用道路の設置に先立ち、事業地内で実施した発掘調査である。本発掘調査では、史跡指定範囲内の最北端に位置する丘陵上の平坦面から、住居跡1軒と土坑1基を確認した。この住居跡の立地する尾根の軸線一帯は、古くから弥生土器が採取される散布地として周知されていた（潮見 1980）。この「弥生土器散布地」範囲内では、平成 14（2002）年度確認調査で西向き尾根の軸線上において住居跡と想定される炉やピットを伴う平坦面を確認している（高下 2004）。このたびの発掘調査において、史跡指定範囲内の住居跡の形状が明確に確認できたことの意義は大きい。ここでは、確認された住居跡がどのように評価できるのか、本古墳群のなかでの歴史的な位置付けについて記してまとめとする。

確認された住居跡の特徴は、①北側に派生する尾根の軸線上に位置し、傾斜が変換する地点に立地する点である。標高は約 33 m に位置し、本古墳群内において立地的に遺構が残存する可能性の高い平坦地としては最低所と言える。これまで本古墳群内で住居跡が確認された場所は、標高 125 m 付近、120 m 付近、113 m 付近、40 m 付近であったが、このたび 33 m 付近が加わることとなった。尾根自体は狭隘であるが東西方向への眺望も良好である。また推定される当時の耕作地や食料調達地との比高は約 20 m である。②住居跡の形状は隅丸長方形である。これまで本丘陵内で確認された弥生時代の住居跡の形状はほとんどが円形であったが、方形系統住居が存在することが明らかとなった。太田川下流域における弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての住居跡の形状の変遷によれば、住居跡の形状の変化が、円形から隅丸方形、隅丸長方形へと変遷し、古墳時代を境に方形系統が卓越するという。また、柱構造については古い時期は柱間距離が等間隔の方形が多く、新しい時期には柱配置が長方形になるものが増加するとされる（植田 1987）<sup>1)</sup>。形状のみからみると、本発掘調査で確認された住居跡は古墳時代以降に位置付けられるが、この年代観は、後述する住居跡から出土した土器の推定年代と大きな乖離は認められない。③住居跡に伴う土器類は、一部在地の煮炊き用や貯蔵用といった壺類や甕類といった土器の破片が認められるが、精良な胎土を素材とする精製器種や高坏類が一定数量認められる点が特徴である。これらが住居内から出土したことは、住居の性格を検討するうえで有用である。④精製器種については、在地系統からは説明しがたく、既存の出土事例から、畿内地域若しくは吉備地域から搬入されたものと考えられる。⑤住居跡から出土した土器については、精良な胎土を使用し横方向に細かなミガキを施すもので、B群と大別される（次山 1993）。これらは畿内地域における布留式土器の構成をなすものであるが、吉備南部地域からの、技術上の諸要素及び工程の具現化が指摘されている（次山 1993）。吉備南部地域の編年でいえば、古墳 1 期～古墳 2 期に位置付けられる（河合 2021）。河合氏によれば、この古墳 1 期～古墳 2 期の時期は、畿内地域においては庄内 2・3 式～布留 0 式との併行関係が指摘され、古墳時代初頭の時期に推定される。実年代では、3 世紀中頃から後半頃と比定される。なお、在地の土器で時期を推定できる資料はほとんど認められないが、当地域の土器編年に照らせば、若島編年Ⅲ－1 段階に相当し、古墳時代初頭の位置付けされる（若島 2002）。

以上を踏まえ、本住居跡の意義について検討する。

繰り返しになるが、本住居跡の最も特徴的なことは、在地系の生活用壺や甕などに混在し、饗膳・祭祀的性格を有する高坏や、外来したと考えられる精製器種が出土している点である。これらは、日常空間における非日常的行為に用いられることが多い器種と考えられる。このことから、当該住居は単なる一般構成員の居住空間にとどまらず、集落内で一定の役割を担う人物の居宅であった可能性がある。畿内地域或いは吉備地域から搬入された精製器種の存在が意味することは、この古墳群のある丘陵一帯における居住集団が、瀬戸内や畿内との一定の関係を有していた可能性を示唆する。この地が内海交通の拠点の一つであったことを踏まえれば、これを掌握していたことを示す資料ともなり得るものである。後に、本丘陵にこの地域を政治的に代表する被葬者の墓所とされる第1号古墳の築造を契機として形成される、中小田古墳群の成立を考える上でも本調査成果は意義を有する。

次に、本住居跡について、古墳群が形成された丘陵内での位置付けについて検討する。本丘陵一帯の居住集団については、平成9（1997）年から実施した遺構状況確認調査によって、弥生時代中期中葉の土器片が出土していることから、遅くともこの時期には居住を開始したと考えられる。現段階で、住居跡は5か所で確認されているが、ほとんどが円形を呈しており、弥生時代後期を中心とするものと推定される。本住居跡は最も新しい時期のもので、古墳時代初頭までは居住を行っていたことが明らかとなった。

古墳群形成の契機となるのは第1号古墳であるが、前方部の位置や形状、副葬品に玉類を包含する点、三角縁神獣鏡と車輪石との組み合わせなどから、4世紀中頃に近い築造と考えられている。したがって、第1号古墳の築造の時期は、本住居跡との時間的な差異が70年から100年近くもあり、直接的な関係は認められない。ただ、第1号古墳築造に先立って、本住居を営んだ居住者を含む本丘陵一帯の居住集団は居住地の変更を余儀なくされるわけであるが、現段階で言えることは、この変更の時期が、本住居跡出土遺物が示す時期である可能性が高いということである。

ここで、本住居跡との関係性が指摘できるのは、平成10（1998）年度遺構状況確認調査で調査された第4号古墳がある。第4号古墳については、中世山城築城に伴って削平された墳丘上で確認された木棺直葬の埋葬施設内から出土した鉄製剣と鉄製袋状斧の型式から、弥生時代終末から古墳時代初頭の築造と推定されている。そして、第4号古墳は、性格的に政治的意味合いの強い第1号古墳をはじめとする古墳群の築造に先行する段階において、「弥生時代後期末葉から古墳時代初頭の集落代表者の墓葬」との位置付けがなされており（平田・高下2021）、したがって、本住居跡出土遺物が示す時期との時間的関連性が認められるのである。ただし、現時点は、両者の直接的関係性を立証することは困難であり、時間的な関連性に留まると言わざるを得ない。

いずれにしても、本住居跡の遺物の出土状況は、何からの儀礼的行為が行われていたことを示唆している。ただし、その具体的意図については不明である。本丘陵上の居住集団内における本住居の位置付けについても、本調査一例のみでは、居住集団の詳細が不明な現状では明確にすることは困難である。しかしながら、少なくとも、本丘陵上において、精製器種の出土が示すように畿内地域あるいは吉備地域との広域交流を行いうる、他地域に影響力のあるリーダーが率いる居住集団が存在したことは確実である。このことは、後に太田川下流域を代表する広域的政治的な性格を有す

る有力者を生む基盤が既に存在していたことを示すものと考えられる。

注

(1) 植田 1987 報告文によれば、他地域との併行関係は記述されていないが、概ね古墳時代はここで言うところの、河合氏の古墳 1 期、庄内 2・3 式期以降とみなされる。

引用・参考文献

植田千佳穂 1987 「Ⅲ 3. 大明地遺跡（4）まとめ 1. 集落跡について」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅳ）広島県埋蔵文化財調査報告書第 55 集 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

河合忍 2021 「吉備南部の精製器種群と布留式土器との関係について—弥生時代後期中葉～古墳時代前期前葉土器の分析から—」『古墳出現期土器研究』第 8 号 古墳出現期土器研究会

高下洋一編 2004 『史跡中小田古墳群遺構状況確認調査報告』財団法人広島市文化財団

潮見浩編 1980 『中小田古墳群—広島市高陽町所在—』広島市教育委員会・広島大学文学部考古学研究室

次山淳 1993 「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第 40 巻第 2 号（158 号）考古学研究会

平田太・高下洋一 2021 『史跡中小田古墳群総括報告書』広島市教育委員会・公益財団法人広島市文化財団

若島一則 2002 「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌』I 平成 13 年度 財団法人広島市文化財団

# 图 版

図版 1



a 下段地点（調査前・南から）



b 上段地点（調査前・南から）



下段地点西壁土層オルソン画像（東から）

図版 3



a SI1 完掘状況 (南から)



b SI1 完掘状況 (東から)



a S11 南北方向土層オルソン画像 (西から)



b S11 東西方向土層オルソン画像 (南から)



図版 5



a SI1 遺物出土状況（南から）



b SI1 遺物出土状況（北東から）



a SK1 完掘状況（北西から）



b SK1 完掘状況（北東から）

図版 7



a 上段地点トレンチ完掘状況（北西から）



b 上段地点トレンチ完掘状況（北から）

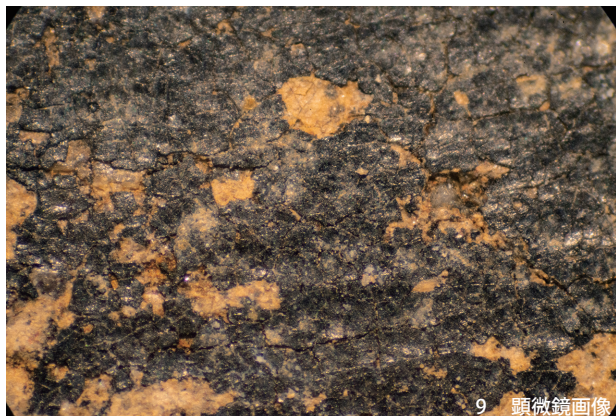


出土遺物 (1)

图版 9



9



9 顯微鏡画像



10



11



12



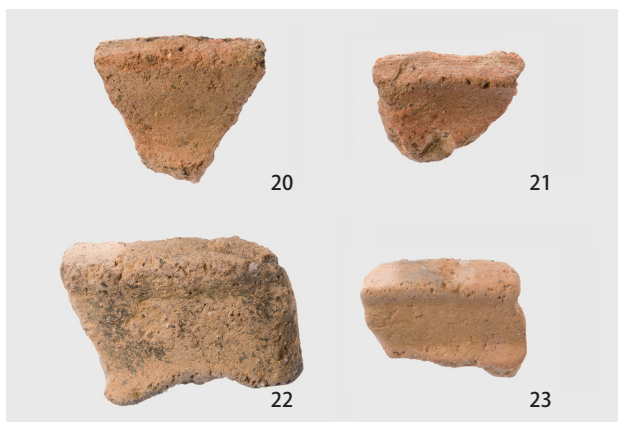
13



14



15



图版 11



出土遺物 (4)





## 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきなかおだこふんぐんせいびじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ —ひろしましあさきたくくちたみなみまちしょざい—							
書 名	史跡中小田古墳群整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —広島市安佐北区口田南町所在—							
副 書 名								
シリーズ名	公益財団法人広島市文化財団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 11 集							
編著者名	高下洋一・近藤博美							
編集機関	公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課							
所 在 地	〒 733-0024 広島県広島市西区福島町二丁目 9 番 5 号							
発行年月日	西暦 2026 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	。 , ′ ″	。 , ′ ″			
なかおだこふんぐん 中小田古墳群	ひろしまけんひろしまし 広島県広島市 あさきたくくちた 安佐北区口田 みなみまち 南町	34106	—	34° 26′ 57″	132° 29′ 42″	20250901 ~ 20260202	67	史跡中小田 古墳群整備 事業に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
中小田古墳群	古墳 散布地 集落	古墳時代	住居跡 1 軒, 土坑 1 基		弥生土器, 石製品, 鉄製品			
要約	「史跡中小田古墳群保存活用計画」及び「史跡中小田古墳群整備事業計画」 に伴う調査。事業地内のうち、史跡指定範囲内の最北端に位置する尾根 上平坦面から古墳時代初頭の時期の住居跡などが確認された。							

(公財) 広島市文化財団発掘調査報告書 第 11 集  
**史跡中小田古墳群整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書**  
—広島市安佐北区口田南町所在—

2026年3月

編集発行 公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課  
〒733-0024 広島市西区福島町二丁目9番5号  
TEL 082-208-4151

印刷 株式会社中本本店  
〒730-0004 広島市中区東白鳥町13番15号  
TEL 082-221-9181